

歴史叙述の中の党派対立

——『グレート・ヤーマスの歴史と古事』をめぐって——

宮川 剛*

(2019年1月7日受理)

1. はじめに

ヘンリ・スウィンデン (Henry Swinden) は、18世紀ノーフォーク州の郷土史家で、『グレート・ヤーマスの歴史と古事』 (*The History and Antiquities of the Ancient Burgh of Great Yarmouth in the County of Norfolk* (Norwich, 1772)) の著者として知られている。ノーフォーク州の港町、グレート・ヤーマス市の歴史書としては17世紀初頭のヘンリ・マンシップの『グレート・ヤーマスの歴史』 (*The History of Great Yarmouth*) が有名だが、マンシップの作品が、19世紀に刊行された際には200頁程度であったのに対して、スウィンデンの『ヤーマスの歴史と古事』は1000頁近い大著で、公文書や書簡などの一次史料をふんだんに用いた記述が特徴である¹⁾。本文や注にそれらの史料を転記しており、史料集的な意味でも重要性は高い。

『ヤーマスの歴史と古事』は26章で構成されているが、その第15章「この都市自治体において2名のベイリフの代わりに1名の市長を選ぶという企て」では、17世紀前半のヤーマス市における党派対立を扱っている。この対立は、市の制度の改変をめぐるもので、中央政府や宮廷をも巻き込みつつ数年間続いた。この対立のプロセスは、R・カストやC・パターソンなど、現代の研究者によってその詳細が解明されている²⁾。こうして解明された党派対立のプロセスを、『ヤーマスの歴史と古事』の叙述と照合すると、スウィンデンの著作の特徴、さらには18世紀の歴史叙述の特徴が解明されるのではないかと。本稿では、そのような認識に基づいて、『ヤーマスの歴史と古事』の記述を詳細に分析していく。

本論に入る前に、グレート・ヤーマス市について簡単に説明しておこう。グレート・ヤーマス市は、中世以来、漁港や貿易港として栄え、人口は、1600年ごろ約5,000人、1700年ごろ約10,000人と推計されている。市参事会員 (aldermen) が24名、市議会議員 (common councillors) が48名おり、彼ら72名で総会 (assembly) を構成して、市の重要事項を決定した。また、市参事会員の中から任

期1年のベイリフ (bailiffs) が2名選ばれ、市の行政を運営した³⁾。

2. 17世紀前半ヤーマス市の党派対立

本章では、近年の研究によって解明された、1620年代後半から30年代前半にかけてのヤーマス市の党派対立の展開を時系列に沿って記述していく。

2. 1 対立の表面化

ヤーマス市の市参事会や市議会のメンバーの間において、ピューリタンと反ピューリタンによる党派対立が表面化するのには、1625年の議会選挙においてである⁴⁾。ヤーマス市は2名の議員を選出したが、この選挙では7名が立候補した。当選したのは、ノーフォーク州のジェントリであるサー・ジョン・コーベット (Sir John Corbett) と、ヤーマス市の市参事会員エドワード・オウナー (Edward Owner) の2名で、どちらもピューリタンのグループの支援を受けていた。この選挙結果に対して、一部市民の間で抗議・反対の動きが見られた。それまで潜在化していた市民内部の対立を水面下にとどめておくことが困難になったことを示している⁵⁾。

反ピューリタン派にとって不利であったのは、中心人物の一人、ベンジャミン・クーパー (Benjamin Cooper) が、一時的に影響力を弱めていたことである⁶⁾。彼には、1623年にヤーマスの港と埠頭の工事のために市民から集めた募金を横領したという疑いがかけられていた。この横領の詳細が市民の前に明らかにされるのは1626~27年のことであるが、1625年の時点で既に横領の疑惑が取りざたされており、クーパーは、ヤーマス市の代表として政府と交渉する役職を退くことを余儀なくされ、代わって、ピューリタン派のトマス・ジョンソン (Thomas Johnson) が後釜に座った⁷⁾。こうして、1620年代後半から1630年代前半にかけて、トマス・ジョンソン、エドワード・オウナー、ウィリアム・ボトルフ (William

*人文科学系・西洋史学

Buttolph) らに率いられたピューリタンのグループが市政を掌握することになる。市参事会員への昇格は主にピューリタン派に限られ、この時期の三回の議会選挙(1625年、26年、28年)においては、2議席ともピューリタン派が独占した⁸⁾。このような状況に対して、クーパーを中心とした反ピューリタン派の反発が強まっていたのである。

2. 2 ヤーマスの制度改変の最初の企て(1626~27年)

1626年7月の総会で、総会の一部のメンバーが、国王からヤーマス市に与えられた特許状の改訂を企てていることが報告された。すなわち、現在、ベイリフは市参事会員の中から選挙で選ばれているが、選挙を止め、年長者が優先的に就任する方式に変更するべき、というものであった。当時、反ピューリタン派の市参事会員クーパーが60歳、ジョージ・ハードウェア(George Hardware)が54歳で、ピューリタン派のどの市参事会員よりも年長のため、これは反ピューリタン派に有利な変更であった。首謀者はクーパーと市参事会員ジェフリー・ニーベ(Jeffrey Neve)と見られている⁹⁾。

多数派のピューリタンたちは、対抗策として、1626年9月の総会でニーベを市参事会員の職から罷免することを決議した。クーパーらは直ちに国王に請願し、ニーベの罷免が不当な手続きによるものであると訴えた。1627年7月、国王はヤーマス市に書簡を送り、党派争いを脇へやって、ニーベを市参事会に復帰させるよう命じた。国王の命令をめぐって採決がなされ、11名の市参事会員とベイリフ2名は国王の命令に従うことに賛成したが、反対派が多数を占め、ニーベの代わりにピューリタン派のトマス・グリーン(Thomas Greene)が市参事会員に選ばれ、ヤーマス市内部の対立は悪化していった¹⁰⁾。

しかし、1627年11月、問題解決につながる変化が起こる。枢密院が、ニーベの問題の審理をピューリタン側に同情的な調停者に委ねる決定を行ったのである。実はニーベは、政府により1626年から徴収されていた強制借入金(forced loan)を納入しておらず、そのことが枢密院の心証を著しく害していた。むしろ、オーナーらピューリタン側は徴収に協力的であった。1628年1月、ニーベが市参事会員を罷免されることが正式に決まった。それと同時にクーパーもピューリタン派と和解し、かつての募金横領の件も水に流されることとなった。対立する両派の和解とクーパーの復権を象徴するように、1628年8月には、クーパーとピューリタン派のリーダーのボトルフの二人がベイリフに選ばれることになる¹¹⁾。しかし、ベイリフとなったクーパーは、再び市の制度の改変を企てることとなる。

2. 3 ヤーマスの制度改変の第二の企て(1628~29年)

1628年12月の総会で市の制度を改変しようとする企

てが再び進行中であることが報告された。すなわち、市参事会員で、クーパーの盟友であるジョン・ダセット(John Dasset)が、国王に請願し、ヤーマスにおける「無秩序で党派的な市政」について苦情を訴え、毎年のベイリフ2名の選挙に代えて、最年長の者1名に市政の権限を委ねるべきことを提案したのである¹²⁾。

ダセットの請願が枢密院で承認されると、1629年3月に国王は法務総裁のサー・ロバート・ヒース(Sir Robert Heath)に、ヤーマス市の特許状の改訂を委任した。ヒースは直ちに王座裁判所で、権限開示訴訟(Quo warranto)を起こした¹³⁾。これを受けて、クーパーとハードウェアは、さらにもう一つ請願を用意し、総会内の自分たちの支持者に署名させた。その請願では、ダセットの請願同様、ベイリフを選挙でなく、年長者優先で指名することが提案されていた¹⁴⁾。

このまま進行すれば、クーパーらの計画は実現するように思われたが、ここで一つ問題が存在した。クーパーのベイリフとしての任期が1629年8月で終了してしまうことである。クーパーが市政の中心ベイリフの職に就いていればこそ、市制改変の計画はスムーズに進行できたのであって、その条件が失われては、多数派であるピューリタン派の巻き返しが生じるおそれがあった。そこで、クーパーは、宮廷内の人脈を活かして、ベイリフ選挙を自派に有利に運ぼうと画策することになる。このときクーパーが頼ったのが、国务大臣のドーチェスター子爵ダドリー・カールトン(Dudley Carleton)であった¹⁵⁾。

2. 4 1629年のベイリフ選挙

1629年7月10日、国王はヤーマス市に書簡を送り、その中で、次期ベイリフ候補として8名の市参事会員の選抜を命じた。そのうち2名は現ベイリフを含むこととされ、クーパーのベイリフ続投のための下準備であることは明らかであった。ヤーマス市の総会は現ベイリフ以外の6名の候補を選んだが、そこには反クーパー派が名を連ねていた。そこで、クーパーは総会の承認なしに独自にベイリフ候補のリストを作成し、それを国王に提出した。

国王はベイリフ指名を国务大臣カールトンに任せしたが、カールトンが選んだのは、クーパー派のトマス・メドウ(Thomas Medowe)とピューリタン派で、クーパーのリストには含まれていなかったロバート・ノーゲイト(Robert Norgate)であった。カールトンは、ヤーマス市内部の対立の解決に重きを置いており、妥協的な人事により、ピューリタン派とクーパー派の和解を画策していたと思われる¹⁶⁾。

2. 5 市参事会員ハードウェア罷免問題(1629年)

1629年7月にクーパーは市参事会と市議会のメンバー

のうち、自分と対立するピューリタン派のリストを作成し、それを枢密院に提出するとともに、ボトルフらが、ヤーマス市の一般市民を煽動したり、国王に反抗したりしている、と報告した¹⁷⁾。

それに対して、ボトルフは7月の総会で演説を行い、ヤーマス市の特許状に危機が迫っていること、彼とその仲間はヤーマス市の利益の擁護者であることを訴えた。また、ヤーマス市の制度の改変を求める者は、この町の破滅を企てている重罪犯人であり、国王に偏った情報を提供して、ヤーマス市について誤った印象を与えている、と指摘して、そのような人々を市の役職から追放すべきであると主張した¹⁸⁾。

クーパーやダセットらが反論を試みるも、出席者からの野次で演説を行うことができなかった。結局、このときの総会でボトルフやジョンソンをメンバーとする委員会が設置され、ヤーマス市に害を為す人物をあぶり出すことになった。委員会の決議により、ハードウェアが楡玉に挙げられ、市参事会員の職を罷免された¹⁹⁾。

クーパーらがこれらの出来事を政府に報告したため、1629年7月29日、枢密院はヤーマス市に対して、ハードウェアの復職を命じた。ボトルフ、ジョンソンに率いられた総会の多数派がこれを拒否すると、国王は8月23日の書簡の中で、ヤーマス市を叱責し、党派争いを止めるよう命じた。その結果、8月29日の総会では、ハードウェアの市参事会員への復帰が承認された。同時に、クーパーのベイリフとしての任期もこの日終了し、ピューリタン派とクーパー派の対立は一時中断することになった²⁰⁾。

2. 6 枢密院での審問 (1629~30年)

1629年11月、ヤーマス市のハイ・ステュワード (High Steward) のポストにドーセット伯エドワード・サックヴィル (Edward Sackville) が就任することが決まった。ハイ・ステュワードとは、いわば都市のパトロンや保護者の役割を果たすもので、有力な貴族や政治家が就任した。ドーセット伯は、枢密院のメンバーで、国王の信頼も厚い廷臣でもあり、かつピューリタン派に同情的であると見られていた。こうして、ピューリタン派は強力な後ろ盾を獲得することとなる²¹⁾。

他方、ロンドンでは、クーパー派との関わりが深い法務総裁ヒースによって、特許状改訂の動きが進行していた。すなわち、1630年5月、ヒースはヤーマス市の新しい特許状作成について国王の同意を得ていたのである²²⁾。新特許状の主な内容は以下のようなものであった。ヤーマス市のトップは2名のベイリフに代わって1名の市長とし、初代市長にはクーパーが就任する。市参事会員と市議会員の定数をそれぞれ半減して、12名と24名とし、それによって、ピューリタン派を総会から追放する²³⁾。

新特許状の内容は、ピューリタン派にも伝わり、その中心人物ボトルフは、国王に請願することで、新特許状の認可を遅らせようと目論んだ。国王は、枢密院の内部に調停委員会を設けて、この問題を審議させるという方針をとった。委員会のメンバーは5名で、その中にはドーセット伯も含まれていた²⁴⁾。

1630年7月、関係者は委員会に出頭して、質問を受けることになったが、特許状改訂派に対して厳しい質問が浴びせられた。特に問題とされたのは、特許状改訂に対して、ヤーマス市の総会の多数派が同意を与えていないことであった。クーパー、ダセット、法務総裁ヒースがこの点について問いただされたが、誰も説得力のある返答をすることはできず、委員会は新特許状の発給を停止するとの決定を下した²⁵⁾。

2. 7 両派の和解 (1630~31年)

特許状改訂の企てを阻止したピューリタン派は、反撃に出て、改訂賛成派を追放するための委員会を設置し、ついに1630年9月、首謀者のクーパーを市参事会員の職から罷免することに成功する²⁶⁾。クーパーは、1630年4月には国王私室 (Privy Chamber) の門衛 (Gentleman Usher Quarterly Waiter) に任命されており、国王や宮廷とのつながりをさらに強化していた。彼はただちに国王に請願し、国王は枢密院にこの件を委ねた。ドーセット伯は、ヤーマス市の指導者たちの間で和解が実現することの方を重視しており、クーパーの復帰をむしろ後押ししていた。1631年6月に枢密院の最終決定が下され、クーパーの市参事会員への復帰が命じられた²⁷⁾。

しかし、ヤーマス市側がクーパーの復職を拒んだため、枢密院はボトルフやジョンソンらピューリタン派の指導者たちを呼び出し、クーパー派と和解するよう説得した。1631年7月、最終的な和解が成立し、クーパーが市参事会員に復帰すること、他方、クーパーのための空席を設けるため、ボトルフが市参事会員の職を退くこと (ただし市参事会員としての待遇は保持)、が決定された。こうして、数年にわたって繰り広げられた、市の制度改変をめぐる対立は、両派の和解によって終息することとなった²⁸⁾。

3. 『ヤーマスの歴史と古事』の視点

スウィンデンは『ヤーマスの歴史と古事』の第15章「この都市自治体において2名のベイリフの代わりに1名の市長を選ぼうという企て」において、1620~30年代のヤーマス市の党派抗争について叙述している。内容の詳細について考察を加える前に、まず叙述の構成につい

て見ておこう。当然ではあるが、スウェーデンの叙述の構成は、前章で紹介した事件の展開と概ね一致している。しかし、二つの点で、明らかな相違が見られる。

一つ目は、前章の「2. 1 対立の表面化」の箇所です。触れた内容が完全に欠落している点である。そのため、『ヤーマスの歴史と古事』では、ヤーマスの党派対立の背景、すなわち 1620 年代後半におけるピューリタン派の市政の独占状態についての叙述が完全に抜け落ちている。スウェーデンは、いきなり、1626 年 7 月の出来事（市参事会員のニーベらによる市の制度改変の企て）から叙述を始めるのである。このことは、ニーベやクーパーら市制改変推進派（反ピューリタン派）の活動についての客観的な解釈、すなわち、クーパーらの活動がピューリタン派による市政独占への反発から生じたのでは、という解釈が成立する余地を狭めてしまう。反ピューリタン派は自派の利益のために活動したという印象を与えることになる²⁹⁾。

二つ目の相違点は、『ヤーマスの歴史と古事』の 15 章の最終部分に見られる。前章の「2. 7 両派の和解（1630～31 年）」に相当する叙述の後、唐突に 1622～23 年にクーパーとハードウェアによる公金の扱いに不審な点があったことについての叙述が続き、この 15 章は終了する。具体的には、ファルツ辺境伯支援のための募金が国庫に納められていなかった件に関して、彼ら関わっていたらしいということである³⁰⁾。党派争いについて叙述した一つの章を、片方の党派のリーダーの過去の失態についての記述で終了するわけである。

以上の点から、スウェーデンの視点がクーパーら市制改変派ではなく、ピューリタン派側に偏っているのでは、と推察できる。この傾向を端的に示しているのが、クーパーらの市制改変運動の開始を告げる 1626 年の企てについての叙述である。

この年、市の統治形態の変更（すなわちベイリフ 2 名に代えて市長 1 名を指名する）をめぐる大きな抗争が始まった。もし、この都市自治体の幾人かの勇氣あるメンバーが、彼らの古来の諸権利と諸自由を守るために大胆に抵抗しなければ、確実にこのような抗争が後から続出したであろう。この抗争は、一部上述したように、その都市自治体〔すなわちヤーマス市〕の一部の党派的なメンバーによってかねてより密かに企てられていたのだ³¹⁾。

「大胆に抵抗」した「勇氣あるメンバー」がボトルフらピューリタン派を指し、陰謀をめぐらせた「一部の党派的なメンバー」がクーパーら市制改変派を指すことは言うまでもない。

事実、クーパーら市制改変派についての叙述は手厳し

いものが多い。前章の「2. 3 ヤーマスの制度改変の第二の企て（1628～29 年）」で触れた 1629 年 3 月の出来事（クーパーらが署名を集めて、ベイリフを年功序列で指名するよう請願した件）については次のように叙述される。

ベイリフのクーパー氏とハードウェア氏は、最年長の市参事会員が年功序列でベイリフになるようにすること以外には用いることはしない、と偽って、總會の一部のメンバーにある文書（これに基づいて、国王陛下に請願がなされた）に署名させたのだが、実際には、この町の体制を変革し、〔ヤーマス市の〕特許状に対して異議を唱えようとしている³²⁾。

クーパーらは、自分たちの目的のために市民を騙して署名を集めたというわけである。

さらに、前章の「2. 6 枢密院での審問（1629～30 年）」で触れた 1630 年 7 月の枢密院での審問についての叙述を見てみよう。枢密院は、市制改変の企てがヤーマス市民の多数の同意を得ていないらしいことに疑問を感じ、改変派を出頭させて、市制改変や新たな特許状取得の理由や根拠について詳細を問いただした。その結果は以下の通りであった。

枢密院の調停者たちの前で、当面の問題に対して、クーパー氏は、市制改変のためであれ、新特許状取得のためであれ、理由や権限について、ただ「ヨーク大主教〔前ノリッジ主教サミュエル・ハースネット〕がかくあるべし、とお考えになったから」、としか答えることができなかった。そして、ダセット氏は法務総裁〔ヒース〕が、王座裁判所首席裁判官（Lord Chief Justice of England）から特許状を作成するよう命令を受けている、と述べた。法務総裁は、いかなる権限によって特許状を作成したのか問われて、ベンジャミン・クーパー氏の権限、としか返答できなかった³³⁾。

クーパーらは、市制の変革を唱えつつも、市民の同意という根拠を得られず、ヤーマス市民ばかりか、国王や枢密院をも欺いた、ということになる。

他方、ピューリタン派には、總會の多数派の支持に加えて、自派の正当性を保証する強力な根拠があった。すなわち、現体制が「古来の慣習（ancient custom）」によって支えられていることである。『ヤーマスの歴史と古事』の叙述では、要所でこの点が指摘されている。一例を挙げれば、1626 年 7 月の市参事会員ニーベによる市制改変の企ては次のように叙述されている。

1626年7月17日開催の総会で、総会の一部のメンバーが、ベイリフ2名を選ぶという古来の、賞賛すべき慣習を変更しようとして、かつ陰謀をめぐらせている、という苦情が提出された。それに対して、一つの提案がなされた。それは、各自の心と良心においてこの古来の慣習を承認し、かつ進んでこれを守る意志のあるものは、ただちに署名するべきである、というものであった³⁴⁾。

その結果、総会のメンバーのうち52名が署名することになる。

以上より、スウィンデンの視点から見た場合、ヤーマス市の党派対立は、古来の慣習、権利や自由を守ろうとするピューリタン派と、陰謀を通じてその慣習の変革を企てるクーパーら反ピューリタン派という構図で理解されていたと考えて問題なからう。

4. 『ヤーマスの歴史と古事』における党派対立

1620年代後半から30年代前半のヤーマス市の党派対立のプロセスにおいて、1629年11月にドーセット伯がヤーマス市のハイ・ステュワード職に就任したことが大きな転機になった。それまで政府や宮廷と太いパイプを有していたのは、クーパーやニーベなど市制改変派の方であったが、ドーセット伯の登場により、形勢が逆転したのである。スウィンデンもこの点を認めて、次のように述べている。

この町がドーセット伯をハイ・ステュワードに選んで以後、この問題全体の秘密（それまではクーパーと彼の仲間によってきわめて内密に進められていた）が公の形で明らかになったのは、まさに伯の影響力によるものであることに疑問の余地はない³⁵⁾。

また、市制改変派の企てを阻止するうえで決定的な役割を果たした1630年7月の枢密院での審問において、クーパーらに厳しい質問が浴びせかけられたが、カストによれば、この審問を主導したのはドーセット伯の可能性が高いという³⁶⁾。よって、ピューリタン派がヤーマス市の旧来の制度を守るうえで、ドーセット伯の貢献はきわめて大きかったと言わざるを得ない。

それにもかかわらず、『ヤーマスの歴史と古事』において、本文でドーセット伯の活動について叙述しているのは、実は、彼がハイ・ステュワードに就任したことに触れた箇所のみである³⁷⁾。これ以外の箇所では、注において、史料として、ドーセット伯とヤーマス市の間の書

簡の内容が転記されてはいるものの、本文では伯は登場しない。果たした役割の大きさを考えると、スウィンデンはドーセット伯の活躍を不当に低く評価していると言わざるを得ない。このことにはどのような事情が関わっているのか。

一つ考えられるのは、都市自治体には元来、外部の貴族による干渉を忌避する傾向があるということである。18世紀に執筆されたイギリス都市の歴史書についての研究において、スウィートは、18世紀の都市自治体において、「独立性」がますます強力な政治的スローガンになっていったこと、都市の「独立性」をめぐる問題が都市の歴史書執筆の動機の一つになっていたことを述べている³⁸⁾。党派対立を自力では解決できず、ドーセット伯の介入に頼ったことは、ヤーマスの歴史において、決して誇るべきこととはいえず、スウィンデンは『ヤーマスの歴史と古事』の中でその事実を可能な限り小さく扱おうとしたのだろうか。しかし、17世紀後半から18世紀初頭のヤーマス市を研究したガウチによると、ヤーマス市は17世紀後半以降も中央の有力者によって保護してもらうことを期待して、彼らをパトロンとして仰いでいたという³⁹⁾。今回の一件だけが例外的な事例であったわけではない。

それゆえ、ドーセット伯の扱いをめぐる事柄は、独立性の問題だけにとどまらず、スウィンデンの歴史の捉え方とも関わる、より大きな問題を含んでいるように思われる。以下では、その点を詳しく考察してみたい。

前章で見たように、スウィンデンはヤーマス市の党派対立を、多数派の支持を得たピューリタン派と、宮廷や政府との人脈を利用して伝統的な「古来の慣習」を破壊しようとして陰謀をめぐらせる市制改変派の対立として理解していた。このスウィンデンの視点から見た場合、ドーセット伯の立場や意図するところは、ピューリタン派のそれと必ずしも一致しているわけではないことに注目すべきである。ハイ・ステュワードに就任した直後の1629年12月18日、伯はヤーマス市に対する書簡の中で次のように述べている。

党派対立があなた方の間で君臨している、と言われている。そのような分裂は、平和と静けさ（それらの中でこそ、どんな社会も最もうまく存続し、繁栄するのだ）を大いに損なうものだ。私は噂を信じる方ではないが、しかし、社会的地位の高い人々が[あなた方の間で党派対立があると]知らせてくれているので、幾ばくかの根拠があると信じざるを得ない。あなた方をお願いする、団結（それこそがあなた方の間に存在するべきものだ）を崩壊させるような不和を仲裁するべく、あなた方の意志と努力を傾注せよ、と。……争いの的となっている点が何

なのかが判明すれば、私は全力でその和解に努めるだろう⁴⁰⁾。

つまり、ヤーマスの市民間の不和を仲裁し、対立する両派に団結をもたらすのがドーセット伯の目標である。あくまでも中立の立場を護持し、一方の党派に肩入れすることはしない。

この方針は、1630年7月の枢密院での審問の結果、市制改変派の企てがほぼ潰えた後、より一層強調されることになる。『ヤーマスの歴史と古事』の注には、1630年8月のベイリフ選挙を前に、ドーセット伯がヤーマス市に送った書簡が掲載されている。その中で、伯は選挙について次のような助言を与えている。

調和というものが、私的な家族と国家をどれほど増進させるかということと言うまでもないだろう。私が深い悲しみとともにあなた方に思い起こさせねばならないのは、あなた方の町がどれほど惨めに仲違いしているのか、そして、その仲違いが、あなた方の町の繁栄を望まぬ者の日々の悪だくみにどのように道を開いているのか、ということである。国王陛下は、この王国の全体のすみずみまで気にかけておられるのだが、あなた方の間で和解がより一層進行することを心から望んでおられる。和解を進行させるための良い手段の一つは、[2名のベイリフとして] 次のような人々を満場一致で選ぶことである——すなわち、健全な信仰をもち、ヤーマス市の利益のために誠実であり、党派から自由であり、そして、自分個人の目的（欲望であれ、野望であれ、復讐であれ）からはなお一層自由である、そのような人々たちを⁴¹⁾。

党派対立から距離を置き、私的な目的や利益よりも、公共の利益を優先できる人物をベイリフとして選ぶよう勧めている。私的な目的の中に復讐が含まれているのが示唆的である。ドーセット伯は、過去の党派対立に拘泥せず、都市全体の和解を実現できる人物がヤーマスには必要だと認識していた。

ヤーマスの市民たちは、そのような伯の思惑とは裏腹に、党派としての意識をひきずり続け、「2. 7 両派の和解(1630~31年)」で見たように、1630年7月以降、ピューリタン派は、対立党派のリーダー、クーパーの罷免を執拗に求めていく。もちろん、最終的には枢密院の説得を受け入れて、ピューリタン派はクーパーの市参事会員復帰を承認し、両派の和解が成立したのであった。他方、この一件についての下の叙述を読む限り、スウィンデンが両派の和解を肯定的に評価していたと考えることはできないだろう。

[これまでのクーパーの行為に対して、総会メンバーの多数が嫌悪感を示し、彼が市参事会員を罷免されるべきことに同意したという] 上述の申し立てがあったにもかかわらず、枢密院の方々に猛烈に陳情や請願をしたことにより、クーパー氏は、彼を市参事会員に復帰させよ、という[枢密院の]書簡を手に入れ、事実、彼は復帰したのである⁴²⁾。

このような「和解」をめぐる、ドーセット伯とスウィンデンの理解の違いに、『ヤーマスの歴史と古事』において、ドーセット伯についての叙述は極めて限定されたものとなったのではない。

ここで想起すべきなのは、イギリスの都市において、ピューリタン革命を境に、党派対立についての認識が大きく変化したことである。ヤーマス市のような法人格を有した都市自治体は、法律上一人の人間であって、本来、内部対立はありえない、と考えられていた。よって、仮に対立があった場合、両派の和解により本来の状態に復帰するという前提が存在した⁴³⁾。しかし、ピューリタン革命期の抗争を経て、王政復古期以降、都市においてもホイッグとトーリの党派対立が常態化すると、対立する党派同士の和解と融和は必ずしも目標とはされず、もう一方の党派の排除が選択肢としてクローズアップされていった⁴⁴⁾。ピューリタン革命期を境とした、このような党派対立の性格の変化が、ドーセット伯とスウィンデンの「和解」の理解に影響を与えていたと考えることができるのではないだろうか。

5. おわりに

以上見てきたように、現代の研究によって解明された知見と照らし合わせると、スウィンデンの『ヤーマスの歴史と古事』にはいくつかの偏りがあることは否定できない。一方の党派に過度に肩入れした叙述や両派の「和解」を促すドーセット伯への低評価など、首肯しかねる点もある。本稿では、これらの点に現れたスウィンデンの歴史の理解の特徴を抽出することを試みた。

しかし、論じ残した点も多い。本稿が対象としたのは、『ヤーマスの歴史と古事』の一部に過ぎず、同様の作業を全体について行った場合、どのような結果を得ることができるのか。

また、ホイッグとトーリの党派対立が本格化する王政復古以降の時代を、18世紀の歴史叙述（特に都市についての歴史叙述）はどのように描いたのか。残念ながら、この問題については『ヤーマスの歴史と古事』では詳し

く扱われていないため、他都市のケースを対象にして考察する必要がある。今後の課題としたい。

注

- 1) 『グレート・ヤーマスの歴史』については宮川 (2017) を参照。
- 2) Cust (1992a); Patterson (1998).
- 3) ヤーマス市の制度については、P. Rutledge (ed.), *Great Yarmouth Assembly Minutes 1538-1545* (Norfolk Record Society, vol. 39) (1970), pp. 1-24. ヤーマス市の人口については、Clark (2000), p. 384.
- 4) この時期のヤーマス市の党派対立を、ピューリタン派対反ピューリタン派 (アルミニウス派) の構図で解釈したのは Cust (1992a)がはじめてである。この見解は、その後の Patterson (1998) でも確認されており、本稿でもこの解釈を採用した。当然、スウィンデンの『ヤーマスの歴史と古事』では、このような宗教をめぐる対立の構図は採用されていない。
- 5) Cust (1992a), p. 8.
- 6) クーパーは、1564年生まれの貿易商で、1595年に市議会議員、1608年に市参事会員となつて、1609年にベイリフとなる。1621年、24年には庶民院議員も務め、ヤーマス市における最有力の市民の一人であった。Thrush, A. & Ferris, J. P. eds. (2010), vol. III, pp. 654-655.
- 7) Cust (1992a), p. 7.
- 8) 1625年選挙については既に触れたが、1626年の選挙では、サー・ジョン・コーベットとトマス・ジョンソンが、1628年の選挙では、ジョン・コーベットの弟マイルズ・コーベット (Miles Corbett) とピューリタンのジェントリであるサー・ジョン・ウェントワース (Sir John Wentworth) が、それぞれ当選していた。Cust (1992b).
- 9) Cust (1992a), pp. 10-11. ニーベについては、Gruenfelder (1988)を参照。
- 10) Cust (1992a), pp. 10-11.
- 11) Cust (1992a), pp. 10-11.
- 12) Cust (1992a), pp. 11-12.
- 13) Cust (1992a), p. 12. 権限開示訴訟については、Patterson (2005) を参照。
- 14) Cust (1992a), pp. 12-13.
- 15) Cust (1992a), pp. 12-13.
- 16) Cust (1992a), p. 13.
- 17) Cust (1992a), p. 14.
- 18) Cust (1992a), p. 14.
- 19) Cust (1992a), p. 14.
- 20) Cust (1992a), pp. 1, 14.
- 21) Cust (1992a), pp. 14-15; Patterson (1998), p. 21.
- 22) Cust (1992a), p. 15.

- 23) Cust (1992a), pp. 15-16.
- 24) Cust (1992a), pp. 15-16.
- 25) Cust (1992a), p. 16.
- 26) Cust (1992a), p. 16; Patterson (1998), p. 23.
- 27) Cust (1992a), pp. 16-17.
- 28) Cust (1992a), p. 17; Patterson (1998), pp. 23-24.
- 29) *History and Antiquities*, pp. 477-481.
- 30) *History and Antiquities*, pp. 515-520.
- 31) *History and Antiquities*, pp. 479-481.
- 32) *History and Antiquities*, p. 485.
- 33) *History and Antiquities*, p. 504.
- 34) *History and Antiquities*, p. 477.
- 35) *History and Antiquities*, p. 502.
- 36) Cust (1992a), p. 16.
- 37) *History and Antiquities*, pp. 501-502.
- 38) Sweet (1997), pp. 212-214.
- 39) Gauci (1996), pp. 48-49.
- 40) *History and Antiquities*, p. 501.
- 41) *History and Antiquities*, p. 505.
- 42) *History and Antiquities*, pp. 513-514.
- 43) Patterson (1998), pp. 4-5.
- 44) Patterson (1998), pp. 24-25; Miller (2005).

参考文献

Primary Sources

- P. Rutledge (ed.), *Great Yarmouth Assembly Minutes 1538-1545* (Norfolk Record Society, vol. 39) (1970).
- Henry Swinden, *The History and Antiquities of the Ancient Burgh of Great Yarmouth in the County of Norfolk* (Norwich, 1772) (*History and Antiquities* と略記) .

Secondary Sources

- Clark, P., ed. (2000), *The Cambridge Urban History of Britain*, vol. II: 1540-1840 (Cambridge, 2000).
- Cust, R. (1992a), 'Anti-Puritanism and Urban Politics: Charles I and Great Yarmouth', *Historical Journal*, vol. 35.
- Cust, R. (1992b), 'Parliamentary Elections in the 1620s: the Case of Great Yarmouth', *Parliamentary History*, vol. 11.
- Gauci, P. (1996), *Politics and Society in Great Yarmouth, 1660-1722* (Oxford, 1996).
- Gruenfelder, J. K. (1988), 'Jeffrey Neve, Charles I and Great Yarmouth', *Norfolk Archaeology*, vol. 40.
- Miller, J. (2006), 'Containing Division in Restoration Norwich', *English Historical Review*, vol. 121.
- Patterson, C. (1998), 'Conflict Resolution and Patronage in Provincial Towns, 1590-1640', *Journal of British Studies*, vol. 37.
- Patterson, C. (2005), 'Quo Warranto and Borough Corporations

in Early Stuart England: Royal Prerogative and Local Privileges in the Central Courts', *English Historical Review*, vol. 120.

Sweet, R. (1997), *The Writing of Urban Histories in Eighteenth-Century England* (Oxford, 1997).

Thrush, A. & Ferris, J. P. eds. (2010), *The History of Parliament: the House of Commons 1604-1629*, vol. 3 (London, 2010).

宮川剛 (2017) 「近世イギリス地方都市の歴史叙述——グレート・ヤーマスの場合」 『群馬高専レビュー』第 36 号。

Factional Disputes in a Seventeenth-Century Provincial Town described in an Eighteenth-Century Urban History: In the Case of Great Yarmouth.

Tsuyoshi MIYAGAWA

Henry Swinden's *The History and Antiquities of the Ancient Burgh of Great Yarmouth in the County of Norfolk* is one of the most remarkable achievements in historical writing in the eighteenth-century England. It has almost one thousand pages, filled with narratives based on documents. In one chapter, Swinden provides detailed narratives on political conflicts in Yarmouth during the 1620s and 1630s between a group of puritan aldermen and their anti-puritan opponents. The anti-puritan aldermen attempted to introduce a less popular form of town government by revising Yarmouth's charter. Each group struggled to secure considerable backing at court. Privy councillors advised town's ruling elites to accommodate internal disputes as quickly as possible.

However, in some crucial points, Swinden's narrative distorts the facts. Swinden shows no sympathy for the non-puritan aldermen. He also underestimates the importance of the part played by the earl of Dorset, the high steward of Great Yarmouth, who tried to protect that corporation from full-scale division. Through the intensive research on the Swinden's narrative, this article tries to show how an eighteenth-century historian understood the political conflict in the preceding century.